

■特集■スポーツの歌〈野球〉

子規を嚆矢として

〈野球〉の歌と言えば、正岡子規である。子規は、アメリカから入って来たベースボールというスポーツを〈野球〉として日本国民の間に広めるのに、大きく貢献した人物なのだ。「ベースボール」を「野球」と訳したのは、中馬庚という人だが、子規は、バッター↓打者、ランナー↓走者、フォアボール↓四球、ストリート↓直球、フライボール↓飛球、ショートストップ↓短遮（中馬による遊撃手の方が定着）等を訳している。また、彼はキャッチャーとしてプレーも楽しみ、一時期は升の本名をもじって野球と号した。

そんな子規には、〈野球〉を題材にした俳句も多いが、短歌としては、ユニフォームを着た自らの写真を見ての〈球と球をうつ木を手握りてシャツ着し見ればその時思ほぬ〉の他、

- ・九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす
- ・今やかの三つのベースに人満ちてそぞろ

に胸の打ち騒ぐかな

・ 上方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

などがあつた。二首目では、満塁のドキドキ感が見事に歌われているだろう。尚、子規はこれらの功績が認められ、二〇〇二年に野球殿堂入りしている。

野球大好き人間の私が、いつかこんな歌を詠みたいと憧れの想いを抱いているのは、次の一首。

・ シアトルのイチローの秋如何ならむ箴言のごときそのうつしみよ

水原紫苑『あかるたへ』

イチローと言えば、私自身へイチローの苦しむ様もまたよきか命取らるることのなれば、〈『野球小僧』〉と詠んだことがあるのだが、イチローのプレースタイルやその言動が醸し出す佇まいのようなものが表現されている水原作には敵わないと思う。

そうではあるのだが、以下、自作の〈野

黒岩剛仁

球〉の歌について考察を加えることとする。

第一歌集『天機』には、五首収めている。

そのうちの一首。

・ タッチアップなど分かっているのか神宮で原を覗いている君のまばたき

（前略）ホームランとかストライクではなく、タッチアップという、ちよつと特殊なルールをもってきたところが、彼女と野球との距離を示して効果的だ。「分かっているのか」という言葉の投げかけには、ただの疑問や心配だけではないニュアンスがにじむ。（中略）下の句は、「神宮」と「原」という固有名詞がうまく生かされている。ヤクルト―巨人戦を、東京ドームではなく神宮球場で見ているわけだが、このほどほどのメジャーな感じだが、デートにはびつたりだ、と私（野球大好きです）には思われる。

俵万智『あなたと読む恋の歌百首』次の歌集『トリアージ』にも、五首あつ

た。二首引く。